

## 柳父章著 「翻訳語成立事情」

人文社会科学研究科 文芸・言語専攻応用言語学領域  
田中佑

本発表では、柳父章氏著『翻訳語成立事情』を紹介する。本書は1982年に岩波書店より出版された新書である。著者の柳父氏は1961年に東京大学教養学部教養学科を卒業、現在は評論家、比較文化研究者として活躍している。また、専攻である翻訳論におけるその他の著書には『翻訳語の論理一言語に見る日本文化の構造(1972;法政大学出版社)』『近代日本語に思想—翻訳文体成立事情(2004;法政大学出版社)』、比較文化の観点からの著書に『比較日本語論(1979;日本翻訳家養成センター)』『ゴッドは神か上帝か(2001;岩波現代文庫)』がある。

本書で扱われている「翻訳語」には、1) 学問・思想の基本用語、2) 中学・高校の教科書や新聞紙面でよく使用される、3) くだけた会話の中ではまず使用されない、という特徴がある。例えば、「社会」「個人」「自由」「彼」は翻訳語である。また、翻訳語は「翻訳のために造られた新造語」と「翻訳語として新たに意味を与えられたことば」の2種類に分けられる。以下、「彼」を例に挙げ、翻訳語の成立過程を見ていく。

「彼」は”he”の翻訳語である。一見すると「彼」と”he”は等しいように見える。しかし、その用法を見ると”he”が三人称代名詞なのに対し、「彼」は指示代名詞という違いがあることがわかる。また、”he”は人間のみを指示するが、「彼」は、歴史的に見てみると、人間だけでなく「物」を指示していたことが分かる。つまり、彼はその指示対象を「物」から「人」へと変えていった語だったのである。

同じ洋書における複数の日本語翻訳版を見ると「彼」の使用数が時代を遡るにつれて減少していくという事実がある。これに関する従来の説は「日本語の文法体系において今まで空白だった部分を「彼」が補填した」というものであった。しかし、柳父氏は「「彼」はよけいなことばとして日本文に侵入した」と考える。つまり、従来の説は欧米文を中心に日本文を見ていることからくる事実の誤認だと主張しているのである。

さらに時代を下った「彼」を見てみると次のような特徴が現れる。まず1点目は、文頭での使用である。これは指示対象が明示されなくても使用できるという点でコ・ソ・ア代名詞的な特徴と言える。2点目は、一度「彼」で指示された人物はその後ずっと「彼」で指示できる点で、この特徴は三人称代名詞的なものと考えられる。そして最後は、「彼」は特定の人物以外を指示しない点である。これについては固有名詞的な特徴と言えるだろう。

「彼」はその昔は「物」から「人」までを指示する語であった。しかし、欧米文からの

影響で上記のような特徴を持つ語となった。そして、このような特徴が日本語の中で定着していく過程で、現在の「私の彼」の用法のように、特定のプラスの価値を持つ人物を指示する語へと変化していったのである。

<質疑応答>

・戸部篤さんからの質問

「発表者がなぜこの本を紹介しようと思ったのか。その動機を聞かせてほしい。」

⇒ 先ず、単純に読んでいて面白く、皆に紹介したいと思ったから。また、授業には言語に興味を持っている人が多く、共通の話題として興味を持ちやすいただろうと考えたことに加え、その中でも翻訳という特殊な分野を扱うことで知識の幅を広げることにも貢献できればと考えたから。

・青木三郎先生からの質問

「発表者がこの本を読んで面白いと思ったところはどこか。」

⇒ ある語が翻訳語として成立するまでの変化をただの意味上の変化としてではなく、その時の社会の状態や変化、その語を生み出すのに関わった当時の知識人たちの知的葛藤という視点から描いている部分。

・山中冴ゆ子さんからの質問

「本書の中で扱われているのは欧米語からの翻訳語だけなのか。」

⇒ 明治維新から大正・昭和にかけての翻訳語の成立を見ているため、欧米語からの翻訳語だけである。